

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：27601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03855

研究課題名(和文) 近現代日本における大衆社会化とジャーナリズムに関する歴史社会学的研究

研究課題名(英文) A study on mass society and journalism in modern Japan from the viewpoint of historical sociology

研究代表者

阪本 博志 (SAKAMOTO, HIROSHI)

宮崎公立大学・人文学部・准教授

研究者番号：10438319

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主な成果は、次の3点である。第1に、大宅壮一の戦時中の活動と占領期そして1950年代の活動とのつながりについて考察し、論考を発表した。第2に、1950年代における百万部雑誌『週刊朝日』『サンデー毎日』『平凡』について、1920年代の大衆社会化状況との連続性も視野に入れて考察した。第3に、『朝日新聞』の女性専用投稿欄「ひととき」に掲載された投書がきっかけとなり1954年7月に結成されたサークル「希交会」の機関誌『あさつゆ』ならびに関連資料の復刻版の刊行を始めた。

研究成果の概要(英文)：The main results of this research highlight the following three points. First, I have examined the activities of Soichi Oya during World War II, the Allied occupation period, and the 1950's and have published papers on these topics. Second, I have examined "Weekly Asahi", "Sunday Mainichi" and "Heibon" which were magazines selling by the millions in the 1950's, taking into account the point of view which acknowledged the continuity with mass society in the 1920's. Third, I have begun the publication process of reprints of "Asatsuyu", the private magazine of 'Kikoukai', and its related documents. The circle, 'Kikoukai,' was formed in July 1954 after the letter appeared in 'Hitotoki', the readers' column for women of "The Asahi Shimbun".

研究分野：社会学

キーワード：メディア史 ライフヒストリー 大宅壮一 『週刊朝日』『サンデー毎日』『平凡』『明星』『ひととき』 希交会

1. 研究開始当初の背景

私は、1950年代を代表する大衆娯楽雑誌であり当時の勤労青少年に最も愛読された、『平凡』の研究に取り組み、それをまとめた『『平凡』の時代』を2008年5月に上梓した。このなかでは、『平凡』を軸としてラジオ・映画・テレビにおいて展開された大衆文化のさまざまな企画を再構成した。それとともに、雑誌の「送り手」「受け手」へのインタビュー調査から、それぞれの様相を明らかにした。その上でこれらを戦後社会に位置づけた。

この1950年代『平凡』研究に携わるなかで、メディア史的観点から大宅壮一に着眼するに至った。『平凡』はテレビが本格的に普及する直前のラジオ・映画が主要なマスメディアであった1950年代に、この両メディアと結びつくことによって大衆の支持を集めた雑誌である。いっぽう1950年代半ばから1960年代半ば、週刊誌・新書に代表される「中間文化」(加藤秀俊)の興隆や民間ラジオ放送の開始・テレビの普及を背景に評論家として最盛期を迎えたのが大宅である。大宅は、新聞・雑誌・ラジオ・テレビを舞台として活躍する「マスコミ四冠王」と言われ、「マスコミの帝王」の呼び名をほしいままにした。これらから、『平凡』と大宅にはメディア史的連続性が見出される。

1950年代は1920年代とともに、日本社会において大衆社会化が進んだ時期である。出版メディアやジャーナリズムの観点からは、1950年代においては、1945年11月に刊行が始まった『平凡』が1950年代前半に飛躍的に部数を躍進させ、1953年に百万部を突破した。1952年には類似誌『明星』が集英社から創刊された。また、『週刊朝日』『サンデー毎日』が1954年に百万部を突破した。近現代日本の社会状況と大宅の活動を重ねると、一度目に大衆社会化が進行した1920年代に大宅は編集・評論活動を開始し、二度目に大衆社会化が進行した1950年代に最盛期を迎えている。

私は、拙著の刊行と前後して、大宅のライフヒストリーに学術的検討を加えた初の論考「大宅壮一研究序説」を『文学』2008年3・4月号に発表した。

その後「占領期の 大宅 壮一」(『Intelligence』第11号、2011年)「大宅 壮一の「再登場」」(『出版研究』第42号、2012年)「1950年代『週刊朝日』と大宅 壮一」(吉田則昭・岡田章子編『雑誌メディアの文化史』森話社、2012年)等を発表し、占領期から1950年代にかけての大宅の活動を明らかにしてきた。これらとともに、大宅の旧制中学時代の資料の調査をおこない、拙稿「中学生時代の 大宅 壮一」(『大衆文化』第10号、2014年)等で、その紹介を進めた。このようにして、大宅のライフヒストリー研究を続けてきた。

2. 研究の目的

大宅は戦前、日本共産党シンパの評論家としてジャーナリズムにおいて活動した。アジア太平洋戦争時には、日本占領下のジャワにおいて、現地人に対する映画を用いたプロパガンダに従事した。しかし、1947年に発表した「亡命知識人論」、そして冷戦下の1955年に発表した「無思想人」宣言において、特定のイデオロギーには属さない立場を表明する。このプロセスを踏まえて大宅のライフヒストリーをとらえるとき、「転向」という観点からだけではなく、ジャワにおける大宅の「戦争体験」が戦後の姿勢に影響を及ぼしたことをも考える必要がある。

また1950年代の大宅を見るとときに、重要なことは、『文藝春秋』『週刊朝日』に連載を持っていたことである。上記のように『週刊朝日』は、1950年代における百万部雑誌であった。『文藝春秋』『週刊朝日』は知的中間層を対象としていた。

以上から、次の2点が研究の目的である。

第1に、大宅 壮一のジャーナリズム活動の全体像を、「転向」「戦争体験」も含めて、ライフヒストリー研究の観点から考察する。

第2に、大宅が最盛期を迎えた背景となる、大衆社会化の進んだ1950年代のジャーナリズムについて、雑誌を中心に、1920年代の初期の大衆社会化状況における活字メディアも視野に入れて、考察する。

3. 研究の方法

国立国会図書館・公益財団法人大宅 壮一 文庫をはじめとする図書館等での文献調査とともに、関係者へのインタビュー調査をおこなった。

また、1950年代のジャーナリズムの研究を進める過程で、『朝日新聞』が戦後設けた女性向け投稿欄「ひととき」に代表される、この時代における女性のジャーナリズム参加の重要性について、強く再認識した。このことから、「ひととき」に1954年4月に掲載されたお手伝いさんの投書がきっかけとなり、同年7月に結成された、お手伝いさんのサークル「希交会」にも着目した。

4. 研究成果

本研究のおもな成果は、次の3点である。

第1に、大宅の戦争体験(戦時中の活動)と占領期そして1950年代の活動とのつながりについてまとめた拙稿「大宅 壮一の戦中と戦後」「没後45年「マスコミの王様」大宅 壮一の知られざるプロパガンダ映画」を発表した。そしてこれらの成果も踏まえた拙稿「大宅 壮一」を、2018年1月発行の単行本において発表した。そのほか、大宅の戦時中の活動と冷戦下での活動との連続性について、東国大学(ソウル)で開かれたフォーラムにおい

て、「日中戦争・アジア太平洋戦争から東西冷戦へ」と題した口頭発表をおこなった。

第2に、1950年代における百万部雑誌『週刊朝日』の読者とのかわりについて、1920年代の大衆社会化状況との連続性ならびに同時代の百万部雑誌『サンデー毎日』『平凡』との比較も視野に入れて考察した拙稿「近現代日本の大衆社会化と活字メディアの読者参加企画」を、発表した。1950年代の主要雑誌については、「1950年代における雑誌『明星』の連載小説とそのメディアタイアップ展開（付・1950年代『明星』連載小説一覧）」と題した資料紹介もおこなった。このほか、『明星』創刊65年目の2017年に、『週刊読書人』紙上において「創刊65周年『明星』連載文芸作品をよむ」と題した短期集中連載をし、研究で得た知見を広く社会に伝えた。

第3に、1954年7月に結成されたお手伝いさんによるお手伝いさんのためのサークル「希交会」の機関誌『あさつゆ』ならびに関連資料を全10巻にまとめた、『高度成長期の女中サークル誌 希交会『あさつゆ』』の刊行を、2017年9月より開始した。同会は、1950年代のジャーナリズムにおいて重要な存在である、『朝日新聞』の女性専用投稿欄「ひととき」に1954年4月に掲載されたお手伝いさんの投書がきっかけとなり、同年7月に結成されたものである。この復刻については、『週刊読書人』2017年10月27日号7面「出版メモ」を皮切りに、『朝日新聞』2017年12月1日朝刊31面「女中たちの機関誌 復刻」、『東京新聞』2017年12月19日朝刊21面「「お手伝いさん」サークル 機関誌復刻」の記事で紹介された（『東京新聞』の記事には誤りがあり、2018年1月24日朝刊23面に「おわび」が掲載された）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2件）

阪本博志「1950年代における雑誌『明星』の連載小説とそのメディアタイアップ展開（付・1950年代『明星』連載小説一覧）」単著、『大衆文化』第18号、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター、17-35頁、2018年3月、査読無

阪本博志「大宅壮一の戦中と戦後 ジャワ派遣軍宣伝班から「亡命知識人論」「無思想人」宣言へ」単著、『現代風俗学研究』第16号、一般社団法人現代風俗研究会東京の会、85-95頁、2015年12月、査読有

〔学会発表〕（計 5件）

阪本博志「大宅壮一の研究 日中戦争から東西冷戦下にかけてのルポルタージュを

中心に」単著、一般財団法人アジア・ユーラシア総合研究所第1回一般研究者・客員研究員研究発表会（於桜美林大学）2018年3月24日

阪本博志「日中戦争・アジア太平洋戦争から東西冷戦へ 大宅壮一の活動をめぐって」単著、第5回「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」2017ソウル大会（於東国大学）2017年10月29日

阪本博志「神吉晴夫に関する考察 大宅壮一との対比の観点から」単著、早稲田大学20世紀メディア研究所第110回研究会（於早稲田大学）2017年3月18日

阪本博志「出版史研究の手法を討議する 7出版研究とライフヒストリー研究 大宅壮一をめぐって」単著、日本出版学会2016年度第4回（通算第97回）関西部会（於関西学院大学）2016年7月30日

阪本博志「大宅壮一の活動における「集団」に関する考察 「大宅壮一東京マスコミ塾」と『茨木中学校生徒日誌』」単著、日本出版学会2015年度秋季研究発表会（於奈良女子大学）2015年12月5日

〔図書〕（計15件）

阪本博志編・解題『高度成長期の女中サークル誌 希交会『あさつゆ』』別巻第1巻、金沢文圃閣、約360頁、2019年3月刊行予定

阪本博志編・解題『高度成長期の女中サークル誌 希交会『あさつゆ』』別巻第2巻、金沢文圃閣、355頁、2019年3月刊行予定

阪本博志編・解題『高度成長期の女中サークル誌 希交会『あさつゆ』』第7巻、金沢文圃閣、337頁、2018年9月刊行予定

阪本博志編・解題『高度成長期の女中サークル誌 希交会『あさつゆ』』第8巻、金沢文圃閣、342頁、2018年9月刊行予定

阪本博志編・解題『高度成長期の女中サークル誌 希交会『あさつゆ』』第4巻、金沢文圃閣、353頁、2018年3月

阪本博志編・解題『高度成長期の女中サークル誌 希交会『あさつゆ』』第5巻、金沢文圃閣、343頁、2018年3月

阪本博志編・解題『高度成長期の女中サークル誌 希交会『あさつゆ』』第6巻、

金沢文圃閣、360 頁、2018 年 3 月

阪本博志編・解題『高度成長期の 女中
サークル誌 希交会『あさつゆ』』第 1 巻、
金沢文圃閣、367 頁、2017 年 9 月

阪本博志編・解題『高度成長期の 女中
サークル誌 希交会『あさつゆ』』第 2 巻、
金沢文圃閣、349 頁、2017 年 9 月

阪本博志編・解題『高度成長期の 女中
サークル誌 希交会『あさつゆ』』第 3 巻、
金沢文圃閣、362 頁、2017 年 9 月

阪本博志「「マスコミの王様」大宅壮一の
青少年時代をよむ」単著、河合榮治郎研究会
編川西重忠編著『増補改訂版 生涯読書のす
ずめ 全国の読書人と青少年・学生に贈
る』、一般財団法人アジア・ユーラシア総合
研究所、174-176 頁、2018 年 2 月

阪本博志「大宅壮一 ふたつの大衆社会
化状況を生きた、「無思想」の「マスコミの
王様」」単著、土屋礼子・井川充雄編『近代
日本メディア人物誌 ジャーナリスト編』
ミネルヴァ書房、231-238 頁、2018 年 1 月

阪本博志「伝統の創造(E.ホブズボウム,
T.レンジャー)」単著、西村大志・松浦雄
介編『映画は社会学する』法律文化社、
219-230 頁、2016 年 7 月

阪本博志「少子化と育児不安 育児雑誌
の世界」単著、工藤保則・西川知亨・山
田容編『オトコの育児 の社会学 家族
をめぐる喜びととまどい』ミネルヴァ書房、
168-182 頁、2016 年 5 月

阪本博志「近現代日本の大衆社会化と活字
メディアの読者参加企画 1950 年代『週刊
朝日』の「表紙コンクール」「文化講演会」
を中心に」単著、谷川建司・須藤遙子・
王向華編『東アジアのクリエイティブ産業
文化のポリティクス』森話社、103-137 頁、
2015 年 7 月

〔その他〕

新聞・雑誌等への寄稿(計 9 件)

阪本博志「創刊 65 周年『明星』連載文芸
作品をよむ 第 3 回 富島健夫『君たちがい
て僕がいた』」単著、『週刊読書人』2017 年
10 月 20 日号 8 面
<http://dokushojin.com/article.html?i=2239>

阪本博志「創刊 65 周年『明星』連載文芸
作品をよむ 第 2 回 三島由紀夫『新恋愛講
座』『わが思春期』」単著、『週刊読書人』2017
年 10 月 13 日号 8 面
<http://dokushojin.com/article.html?i=2203>

阪本博志「創刊 65 周年『明星』連載文芸
作品をよむ 第 1 回 源氏鶏太『青空娘』」
単著、『週刊読書人』2017 年 10 月 6 日号 7 面
<http://dokushojin.com/article.html?i=2168>

阪本博志「『朝日新聞』『ひととき』欄から
生まれた女中サークル「希交会」の機関誌『あ
さつゆ』の復刻」単著、早稲田大学 20 世紀
メディア研究所『Intelligence』購読会員限
定ブログ(文生書院)第 17 回、2017 年 6 月
28 日

阪本博志・田島悠来「出版史研究の手法を
討議する その 7 出版研究とライフヒストリ
ー研究 大宅壮一をめぐる」共著、『日
本出版学会会報』第 142 号、日本出版学会、
29-30 頁、2016 年 10 月、担当部分: 29-30 頁
<http://www.shuppan.jp/bukai/12/847-72016730.html>

阪本博志「創刊 40 周年 初期『POPEYE』
の媒体資料をよむ」単著、『週刊読書人』2016
年 6 月 3 日号 7 面
[http://www.miyazaki-mu.ac.jp/sp/info/me
dia/40_popeye.html](http://www.miyazaki-mu.ac.jp/sp/info/media/40_popeye.html)

阪本博志「大宅壮一の活動における「集団」
に関する考察 「大宅壮一東京マスコミ
塾」と『茨木中学校生徒日誌』」単著、
『日本出版学会会報』第 141 号、日本出版学
会、7-8 頁、2016 年 4 月
<http://www.shuppan.jp/shukihappyo/774-201512.html>

阪本博志「没後 45 年「マスコミの王様」
大宅壮一の知られざるプロパガンダ映画」単
著、『東京人』2016 年 2 月号、都市出版、116-123
頁

阪本博志「ワークショップ 3 マンガ研究
とメディア研究 「漫画化」を手掛かりに」
単著、『マス・コミュニケーション研究』第
88 号、日本マス・コミュニケーション学会、
199-200 頁、2016 年 1 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阪本 博志 (SAKAMOTO, Hiroshi)
宮崎公立大学・人文学部・准教授
研究者番号: 10438319